東京 生と死を考える会
会報 カイロス 2007年9月

◆ 学びの広場 ◆

IWGブラジル会議に参加して　スピリチュアリティについて考える

鈴木 剛子(グリーフ・カウンセリング・センター代表)

6月 17 日～22 日にかけて、死生学の国際的な学会—IWG*1 の会議に参加して来ました。IWG は、もう一つの有名な学会、ADEC*2 と共に、この分野の著名な研究者、教育者、臨床家たちの多くが集う団体ですが、前者は、他の様々な学会と異なり、参加資格の審査があり、招待制である点が一つの特色です。(*1 International Work Group on Death, Dying & Bereavement 、*2 Association of Death Education & Counseling)

IWG およびADEC へ日本を代表して毎回参加されているのは、私たちの敬愛するリーダー、デーケン先生です。今回先生は「生と死を考える会」の全国協議会の大会と日程が重なって、IWG はご欠席でした。「IWG の皆さんにくれぐれもよろしく伝えて下さい」との先生のメッセージを携えて、私は地球の裏側、ブラジルに出発したのでした。

IWG は、18 ヶ月に一度開催され、開催地は持ち回り制です。ちなみに 2005 年は香港、そして今年はブラジル。日本から 24 時間かかる遠隔地ということで、長旅による疲れも懸念され、私は大いに躊躇しました。しかし、せっかく招待された又とないチャンス、思い切って参加することにしました。

IWG のもう一つの特色は、テーマ別、グループ別の分科会をプログラムの核にしている点で、参加者は、選択により、どのグループに参画するのか、初日に決めます。会期を通して、そのグループの仲間と、同じテーマについてディスカッションをするというものです。それが会議の大切な要素なのです。

一方、参加者全員が一緒に聴講する全体講演が一つ、他に、分散して聴講することができる複数の学術発表などもありました。全体講演では、地元ブラジルのホスピス医が、尊厳死について、現地の状況を紹介しました。

最も印象深かったのは、分科会でした。グループに参加して、IWG が全員の積極的な参加意識、意見交換、相互理解、親睦を大きな目標に掲げていることが、実感として分りました。

また、その為の交流の場は、全員同じホテルに合宿することにより、会議室に限らず、日に3回の食事のテーブル、2回のコーヒー・ブレーク、夜更けの Happy Hour に至るまで、潤沢に用意されています。朝8時から夜 11 時まで、ネットワーキングをしたければ、それも可能です。ただし、気力、体力と相談しながらのことですが。

私にとっては、5～6年前まで(特にカナダに留学中)本分野の教科書の著者として尊敬していた著名な先生たちに出会い、同じテーブルで討議したり、時には、食事のテーブルで気楽にお話したり出来たことは、最初は緊張感もありましたが、まさに夢のようなことでした。しかし、夢が現実となり、周囲はいつの間にか「共に死生学の啓蒙と普及を志す同士」という意識を、私に植え付けてくれたのです。

さて、分科会ですが、全部で5テーマ(5グループ)ありました。そのテーマとは、(1) グリーフと用語の問題、(2) 武装した紛争、(3)スピリチュアリティ、(4) 複雑化したグリーフ、(5) 末期患者の疎外感など、でした。私は「スピリチュアリティ」「複雑化したグリーフ」との両方に興味があり、どちらに参加しようか、迷いました。グリーフ・カウンセラーとしては、後者が実践面で役に立つと思ったのですが、個人の喪失体験に照らして、前者にも魅力を感じ、結局「スピリチュアリティ・グループ」に参加しました。

このグループには、何と日本人5名が全員参加しました。日本人は、スピリチュアリティに大きな関心がある国民と、主催者に印象づけたことでしょう。他に、ドイツ人3名、アメリカ人3名、ブラジル、中国、カナダ、ニュージーランド、ノルウェー、英国人各1名がおり、全9カ国、17名でした。職種も医師、ソーシャルワーカー、カウンセラー、セラピスト、聖職者、哲学・社会学博士などと多岐にわたっていました。まさに、人種や文化の壁を越えて、人類の普遍性を探求するのが、グループの目的で、それ自体、大変スピリチュアルな試みと理解しました。

しかし、スピリチュアリティは、意味が広く、深く、また、つかみ所のあるようでない言葉というのが、皆の印象でした。日本語にもピッタリの訳語は見当たらず、外来語として扱われることが多いようですが、ノルウェーの参加者も、同じことを指摘していました。

そこで、今回のグループは、まず銘々が、スピリチュアリティについての定義を提案することから、スタートしました。私は、カナダ留学中の指導教官、ジョン・モーガン教授に叩き込まれた定義を発表しました。その定義は、以下の通りです：

「スピリチュアリティとは、時間や空間の制約を越えて事象を再現させる人間の能力をさす」。例えば、私は今、東京にいながら、1ヶ月前に経験したブラジル会議について回想し、読者の皆さんにその模様を伝えようとしています。それは、単なる記憶力の問題でもなく、思い出にふける話だけでもなく、私にとっては、ほぼ会議を丸ごと追体験するという意味があり、それがスピリチュアリティのなせる技というのです。

グリーフの視点でよく指摘されることですが、最愛の人を亡くした人が、時空を越えて、いつまでも故人との絆を保っているということがあります。これを可能にするのは、スピリチュアリティに他なりません。

さらに、人間の持っている能力のうち、「物事を抽象的に考える、各論から総論へと事柄を普遍化する、経験に意味づけをする、複数の選択の中から一つを選ぶ、未来に希望をいだく」などは、全て人間のスピリチュアリティと言えるのです。

人間のスピリチュアルな活動には、哲学、宗教、文学、詩作、アート、音楽、ユーモア、瞑想、その他クリエイティブな活動の全てが含まれるわけです。

モーガン教授は、哲学者であり、死生学の教育者ですが、彼の定義が哲学的過ぎて、難解と感じる人もいるようです。しかし、私はこの定義が、スピリチュアリティについて正しい解釈をし、そのあらゆる側面を理解するのに大変有効だと思っています。

この定義から、スピリチュアリティとは、人間が誰しも生まれつき備えている普遍的な能力であり、決して特殊な人だけに備わった超能力とか霊感などを指すのではないことが、極めて明確になります。

その意味で、宗教もスピリチュアリティの一側面に過ぎないのであり、また、モーガン流に言えば、一般に宗教と言われるものは、「制度化した宗教」のことで、自由主義も民主主義も、「何とかイズム」と言われる主義主張は、全て「宗教」と言えるのです。

今回、グループの仲間から、スピリチュアリティについて学ばせてもらったことが、多々ありましたが、その幾つかを紹介します。

「自分より大いなる存在、有限的な自分の心や気持ちを遥かに越えた存在、そのような存在との関係を可能にし、その関係において自分をユニークにしてくれるのが、スピリチュアリティである」。これは、神と人とに奉仕する仲間の素晴らしい定義でした。

また、スピリチュアリティとは「目に見えないものとの繋がり、繋がろうとする信念」、「自己存在の究極の意味」、「絶対的な存在と、自己の究極の目的地への傾倒」、「スピリチュアリティは、抽象的な言葉だが、人間存在のあらゆる側面に具現化している」など、皆それぞれの経験と立場から、含蓄のある考えを披露してくれました。

特に「心と心を繋げる力」「大いなる存在との関係を実現する力」としてのスピリチュアリティ定義は、他者との関係、神との関係を重要視する提案者の気持ちが伝わり、私は、視野を拡げてもらった思いでした。

定義の作業を終えて、その後グループは、終末期患者へのスピリチュアル・ケア、子供に対するスピリチュアリティ教育、スピリチュアリティの「暗黒面」、苦しみとスピリチュアリティなどのテーマで白熱した議論を交わしました。それぞれ興味深い内容でしたが、紙面の関係で、ここにご紹介できないのが残念です。

会議最終日には、全体集会があり、その際各グループのリーダーが趣向を凝らして、8回の討議のまとめを発表しました。スピリチュアリティ・グループについて言えば、全回を通して結論めいたものに到達したわけではなく、議論の過程そのものが有意義であったと報告しました。形のないものを、言葉を駆使して互いに理解しあう努力をした、しかも、人種や文化の壁を越えて。これぞまさに人が人たる由縁、スピリチュアリティの具現化でした。

5日間、寝食を共にし、心を開いて話し合ったIWGの同士たちに感謝し、別れを告げ、大衆音楽ショーロの演奏を思い出に、ブラジルを後にしました。